

平成 28 年 5 月号

今月の断酒表彰

- ☆ N・T さん 南千里支部 断酒 七年
- ☆ N・K さん 吹田支部 断酒十一年
- ☆ M・N さん 南千里支部 断酒十六年

断酒表彰おめでとうございます。ますますのご活躍を期待いたします。

断酒に思う (67)

思い出

吹田支部 A・D

今、私は長女が生まれた 18 年前頃のことを思い出しています。

あの頃、会社は滋賀県栗東でした。会社が終わってから、妻の病院に駆けつけて出産の立ち会いをしたこと、子供が生まれて涙したことを覚えています。しかし、あの時も栗東から電車で山科の病院に行く前にワンカップを飲んでいてに思います。

それから半年後、娘がアトピー性皮膚炎であることがわかりいろいろ調べました。皮膚科はもちろん酸性水で殺菌したり、牛乳のアレルギー・卵のアレルギーで大豆から作った粉ミルクを飲ませたりしました。それでも、顔が腫れて眠たくなるとは掻きむしる大変でした。

そんな中で無農薬の野菜を作ろうと吹田市の市民農園に応募しました。みごと当たり、ちょうど今頃（五月の連休）に畑を初めて耕したのを覚えています。無農薬で野菜を作るのは本当に大変でした。葉に付いた虫を一匹一匹手で殺し、土の中に潜んでいる虫を殺し、出勤前に早く起きて毎日やっていました。

それが、いつの間にか畑の自分の道具箱に日本酒のバックを入れるようになり、休日には誰も来っていない時間に起きてワンカップの空の容器に一杯ついで、虫を探す様になりました。予定のない休日には、丸一日畑で過ごすもんですから、昼食を取りに家に帰る頃にはふらふら。すると妻が「ふらふらやんか！どこで飲んできたん？」とどなられる。しまいには、昼は食って来たことにして家に帰らず子供が呼びに来る始末。

あの頃の妻は、毎日二人の子がアトピー性皮膚炎で毎日夜中も十分な睡眠がとれてなかった。それでも、酒は止めるつもりは私には全くなかった。

妻が手紙で「一人で子育てをしているみたい。別れて欲しい」と手紙をもらったのが 8 年前です。最後の方は安定剤と睡眠導入剤＋アルコールで頭がおかし



平成 28 年 5 月 2 日発行 No.159

編集・発行 事務局・広報部

<http://suitashi-danshukai.net>

くなっていたとはいえ、今思うと妻は長女が生まれてから 10 年もよく頑張っていたなと思います。

新阿武山病院で平野先生からベンゾジアゼピンの薬のこと、家族をなくし、仕事もなくし、命までなくす病気であることを聞きましたが、薬はともかく私の周りには酒を飲む人だらけで、全く信用しませんでした。私の飲む量（一日 5 合）は、そんなに多くないと本気で思っていました。

断酒会に行かないと、平野先生が診察の時に不機嫌になるので、最初は渋々ぼけた頭で毎週土曜日に例会に出るようになりました。だんだん体験談も耳に入って来るようになり、足がつるとか指はつるなど同じ事が自分でもあると感じ始め、だんだんお酒が薬物であることを理解出来るようになってきました。

吹田市断酒会の皆様には、いろいろお世話になりました。頂いた知識や思いは、次の会員さんに返せる様な人間になるよう精進して行きたいと思えます。

今月の「指針と規範」断酒会規範

四 断酒会員としての活動は、原則として無償である

われわれの断酒活動は以外に費用がかかる。積極的に取組めば取組むほど金額がかさむ。日常的に聞かれている断酒例会、全断連主催のブロック大会、全国大会、加えて、各地で盛んに開催されている研修会、断酒学校、記念大会等に参加することによって、われわれには過去の飲酒代に匹敵する出費がある。

しかし、同じ出費であっても中味がまるで違う。一方はひたすらに破滅の道を進むための経費であり、一方は新しい人生を生き抜くための経費である。すべてが幸福の追求のために支出されているので、誰も惜しいとは思わない。自前であるのは当然のことである。

酒害相談活動は意外に時間がかかる。相談者は、酒を飲み続けるか断つかの二者択一という簡単なことだとは決して思っていない。酒をやめたくてたまらない反面、飲みたくてたまらない欲求にも駆られているので、そうした心の葛藤が整理されるのに要する説得の時間はぼう大なものになる。

また、酒害相談は夜間だけとは限らない。急を要する相談を受けた場合は昼間でも、自分の仕事を放棄して駆けつけることがある。酒害相談活動に積極的になると収入が減るといのは事実である。しかし、どんなに時間を費やしても、どんなに収入が減っても、酒害相談活動は無償である。

われわれは断酒することによって、自分を愛することができるようになった。家族との愛も復活した。断酒仲間は勿論、自分の周囲にいる人たちまで愛せるようになった。人間愛という最高の愛を自分の手にした今、過去の自分と同じ悩みを持つ人たちに奉仕することは、当然すぎるほど当然なことである。

また、われわれが悩み苦しんでいた頃、先輩会員がわれわれのためにしてくれたことを思い出せば、酒害相談活動が有償であってよいわけがない。

われわれがやっと断酒に踏み切り、酒のない生活に喜びを感じ始めたとき、「何かの形で恩返しをしたい」と申し出ると、「同じことを酒で悩んでいる人たちにしてほしい」と断られた。

受けた恩は次の人に、次の人はそのまた次の酒害者につなぐことが、断酒会式の恩返しだと教えられた。これは断酒会員ならではの愛であり、断酒会の尊い伝統である。

酒害相談以外の、断酒会員が他の会員のためにする行為も無償である。同志愛がさせるものであるからである。

広く社会に向って行われる酒害啓発活動も無償である。広い視野で考えると、酒害者をつくらないこともわれわれの酒害相談活動の中に入るのである。

(指針と規範 P59～P61)



吹田市断酒会会員の現況

(平成 27 年度府断現況調査から。

平成 28 年 4 月 1 日現在)

- 1 会員数：男性 27 名、女性 1 名、計 28 名
- 2 入会者数（平成 27 年度中）：男性 3 名、女性 0 名 計 3 名
- 3 準会員数：6 名
- 4 会員の年齢構成：40 代 2 名、50 代 7 名、60 代 9 名、70 歳以上 10 名
- 5 会員の断酒歴：1 年未満 7 名、1 年～3 年 4 名、3 年～5 年 4 名、5 年～10 年 2 名、10 年～20 年 8 名、20 年以上 3 名
- 6 会員の入会時の年齢：30 代 1 名、40 代 9 名、50 代 8 名、60 代 8 名、70 歳以上 2 名